

こうちゃんと  
ボク

添嶋 譲

## 週末旅行

---

「ヤニくさい。」

とって、こうちゃんはボクの体を踏みつける。  
体のことを気づかってくれてるのではなくて、  
単にキスのときにヘンな味がするのがキライだからだ。

友だちといるときはけっこう作ってるみたいだけど、  
ボクといるときは浴衣がはだけててもきにしない。

「パンツみえてるよ」

「……………！」

ほらね。顔なんかまっかにして、  
けっこう、カワイイ。  
ヤなことあって、ムスツとしてるよか、  
そっちのほうが全然いいと思うんだけどな。

あ、逃げた。

と、思ったら、ふとんの上だ。  
しかえし。踏みつけてやった。  
そら、逃げろ。

「お風呂いってくんね」

後ろから、おいかけてくる気配。  
こうちゃんのそれは、分かりやすい。

「せっかくだから、一緒に」

照れ隠しにタオルを首に巻かれて  
連行された、けど。  
見えないところで、手をつないでくれた。

## レンタルビデオ

---

こうちゃんは機嫌が悪い。  
ケンカをすると決まってうちにくる。  
で、ビデオを3本見ていくんだ。

「……………」

なーんにも話してくれないんだね。  
いつもそう思うんだけど、でも、  
いうと怒るからだまってる。

「コーヒー、入れてくんね」

「……………」

前にふられたときは、ひとばん、プレステしてった。  
鼻水すする音がしたけど、ほっといた。  
ティッシュが一箱、なくなった。

「ここ、おいとくね」

「……………」

どん、どん。

床をたたく。  
となりにいてほしい合図(サイン)。  
斜めうしろにしゃがみこむ。

どん、どん、どん。

ここにすわれっていうことらしい。  
はいはい、わかったよ。  
コーヒーの分だけ間をあけて、二人して体育すわり。

ボクは、こういうときにしか頼りにされない。  
それでもいいんだけど。なんて。うそ。ちょっと。

あんまりくやしいから、横っばら、つついてやった。

「!!!!!!!!!!」

どうだ。ケンカした、罰だ。

と思ったら。 がし。  
ヘッドロック。あのー。

「痛いんですけど」  
「るさい」

しょうがないなあ。  
この映画が終わるまで泣いててもいいよ。

## まちあわせ

---

いいだしたのはこうちゃんの方だ。

「見たい映画があるんだけど」

映画館の前でずっと待ってるのはボクのほうだ。

今日2回目のいれかえがおわった。

こんなことだったらむかえに行けばよかったかな。

これで遅刻とすっぽかしは何回目だったかな。

いつものことだ。わかっているけど。

まさかホントのデートでもやってないだろうな。

いいかげん待ちくたびれた、から。

映画のことも、こうちゃんのことも、

もうどーでもよくなった、ことにして。

こうちゃんちに電話することにした。

「待ってもこないから、帰るね」

これだけ言うために。

なかなか見つからない公衆電話に機嫌を悪くして

買ったばかりで使いかたがいまいちわからないケータイを使って

電話した。2回、チュウチョしたけど。

3回ベルが鳴ってでなかったら、切ろう。

こうちゃんちは5回目で留守電になる。

あんまり鳴らしすぎると、寝てたら起こしちゃう。

と、思ったのに。

1回目で電話に出た。コノヤロ。

「.....起きた？」

「...うん？」

.....あ~~~~~っ！！」

あんまり大きな声で言うもんだから、

こっちの方がびっくりしちゃうよ。

いうはずだった用件はすっ飛んでしまって、

仕方がないから「待つわ」を歌ってやった。  
後ろのジョシコーサーが笑ってる。  
ちくしょう、待つ身にもなってみろ。

「ちゃんと目が覚めたらおいで。  
しかたないから待ってる」

で。待つことさらに30分。  
フルコーラスうたって6回目。  
やって来たこうちゃんは、気まずそうに、  
てれくさそうに笑ってる。  
ムツとしてたはずなのに。まずいなあ。  
ゆるさないとダメかなあ。  
(きっとあの人もこの笑顔に弱いんだろうな。)

「……ゴメン」  
「オムライスでゆるす」  
「コーヒーもつける」  
「はい、決定。」

でもね、こうちゃん。その前に。  
せっかくだから、ネグセ、なおしておいでよ。  
あわててきたのだけは認めてあげるからさ。ね？

## 真夜中の訪問者

---

どこをどう歩いてきたのかわからないけど、  
というようなことを時々きくけど、  
まさか自分がそれをやるとは思ってなくて。  
夜中、眠ろうとして電気を消すとなんだか  
ものすごく寂しくて、怖くて、  
(情けないなとは思っていたけど)  
どうしていいかわからなくなって、で。  
気がついたら、ここはこうちゃんち。

電気は消えてるし(そりゃそうだ)  
起こすと怒られちゃうし(前科あり)  
でも、そばにいてほしいし。

もうちょっと素直だったら、いいのに。  
あの人みたいに。ちえ。

ドアの前にへたり込んで、ぼーっとしてた。  
サミシイキモチ。アブクタッテ、ニエタッテ。  
こうちゃん。ボクはどうしたらいいんだろう？

と。  
「なにやってんだよ。んなところで」  
声の方を見上げる。こうちゃんだ。  
やばい。涙目。パレる。

「犬を拾ったことはあるけど、人間は拾ったことはないぞ」  
「じゃ、いますぐ拾ってください」

なんでもいいよ。こうちゃん。  
こうちゃんじゃなきゃダメなんだ。  
こんなときにわかるなんて。素直じゃないな。

「高くつくぞ？」

こうちゃんは、ボクの襟を引っつかんで、家の中へ。  
コーヒーと毛布とまくらを支給された。

「寝相が悪いから、ベッドから落としたらごめん」

そうって、半分、場所をあけてくれた。

電気が消えて。

1、2、3、ぐう。もう寝てる。

人の気も知らないで。知ってたら、オオゴトか。

毛布を頭までかぶって、目を閉じた。

どさくさに紛れて、手をつないでみた。

あたたかかった。

手を握りかえしてくれたような気がしたけど、きっと気のせいだ。

それでもいいや。

ボクは、こうちゃんが、大スキだ。

(朝、こうちゃんの下敷きになって

目が覚めたけど、それはまた別の話。)



## 回転木馬

---

なんでボクがついてかなくちゃいけなかったのかな。  
こんなこと、ちょっと考えればすぐにわかることなのに。  
のこのこついてきたボクは、おおバカ者、だ。

さっきからふたりののったアトラクションが  
何度も何度もボクの前を通ってく。

あーあ。うれしそうに、手、なんかふっちゃってからに。  
ボクは半分あきれて、手をふりかえした。

やっぱり、こうちゃんはその人というほうが機嫌がいいな。  
ボクなんかといたって、ぜんぜんそんな顔なんかしないくせに。  
こういうときの青空って、とどめをさされているようで、  
なんか、やだ。

「あっきーもなんかのればいいのに」  
と、ご満悦のおふたり。  
さっき、お一人様はご遠慮くださいっていわれたの  
知ってるくせに。  
でも、口に出した言葉は、これ、だった。  
「ジャマしちゃ、悪いでしょ？」

「や、べつに、そんなことは」  
「そうだよ。呼び出したのはこうちゃんの方なんだから」  
ぺたんとふたりが腰をおろす。  
ボクをはさんで、こうちゃんと、あの人。  
こーいうの、すごく、困る。困るんだよ、とつても。  
んで、この状態で二人で会話なんかはずんじやった日にゃ。

「ゴーモン」と、世間ではいうんだよ。こうちゃん。  
でも、きっとわかってないんだろうな。

もう。せっかくいい天気なのにさ。  
曇ってばかりもいられないから。  
有無をいわず、自動販売機にダッシュすることに決めた、  
今日のボク、なのでした。

## ドライブ

---

ふたりして、車の、中。会話、なし。  
窓の外、夏が流れる。  
昔なら、ひとりでしゃべってた。  
今は、そんなことはしない。子供じゃないんだし。  
それに、会話は射的ゲームじゃない。  
わかりきったこと、だけど。さ。

「最近、元気なさすぎ」  
違うよ。そんなんじゃないくて、こうちゃんに合わせてるだけ。  
うざったいのはクライだって、あれだけ行ってたじゃん。  
それだけのことだよ。

今日みたいな日はオープンカーのほうが気持ちいいよね  
あれって思ったよりも暑いらしいよ  
そうだけど でも そんなこと言ってたらなんにもできないよ  
まァ あっきーらしい発言でございますこと

窓を全開にして、タバコに火をつけて。  
(「ヤニくさい」といわれたのはもう何年も前のこと。)  
日の光をたくさん含んだ風を顔にうけたまま  
どっかの有閑マダムの家から誘拐されたイヌ、みたいに  
おとなしくしっぽ振って、ついてくだけ。  
はじめてふたりで行動した、あの時、から。ずっと。

最後は、こうちゃん次第なんだからね？

「ねえ、こうちゃん」「ん？」  
「.....すき。」  
「ばかものっ はずかしいから、やめなさいっ」

想像通りの、リアクション。ちょっとつまんない、かな。

もうすぐつくんじゃない？  
.....ん？ あ、ああ。

ほら、ちゃんと正面むかなくちゃ、事故っちゃうぞ。

## 夜のブランコ

---

「その公園にいるから」

と、電話がかかってきて。

友達がきていたけど、ゴメンとひたすら謝って  
ダッシュ。こうちゃんが、待ってる。

だだっ広いグラウンドの向こう。灯の下に、ブランコ。  
ボクを見つけると、こうちゃんは手を、振ってくれた。

「そんな走ってくることはないのに」

「だって。こうちゃんが電話してくるなんて思わなかったし」  
最近すっかりフジイといい感じだしね。  
ボクなんか、いらないんだろうなって。思ってたから。

「なんか、ひさびさにあっきーの声聞いて、ドキドキした」  
「なんてことをおっしゃいますやら」  
その気もないくせに。

ボクが座ったブランコに、こうちゃんは乗っかってきて  
こぎだす。くさりがギシギシ音をたてる。

「やっぱ歳とると、重くて動かないなあ」

「もう4年だよ」

「でも、まだ4年しか経ってないよ」

「ボクはもう待ちくたびれちゃったよ？」

はじめてあったときに、聞いた言葉の返事。

まだ、もらってなくて。こうちゃんは好きな人がいて。  
わかってることなんだけど。

わかって、いる、んだけど。

「スキ、だったよ」

真上から、言葉。

「恋とか、そんなんじゃないくて、あっきーのことは。別格。

でも、いまはフジイのことしか考えられないから。

ごめん。でも、ずっとスキだったよ」

ずるいよ。こんなところで。いまさら、そんなこと。

ああ、こういうときって泣くんだらうなって思ってたけど、  
ふしぎと、涙は出てこなかった。  
それっきりボク達は黙ってしまって、ブランコはどこへも行けずに  
何度も空へ飛びだそうとする。ムリだよ。あきらめなよ。

「あのさ」「あのね」

声が、シンクロする。

なに？ って顔をしたら、こうちゃんが。

「フジイがさ、よけいなこといったかもしれないって、あっきーに」

「別に気にしてないって、いっついて」

もう、いいよ。きっと、始めっからこうなるって、わかってたんだから。

ボクはブランコから降りて。

帰るともなんともいわないで。

「コーヒー飲まない？」

「また今度にする」

こうちゃんの顔を見ないでバイバイした。

## かなしいことり

---

ふたりしてずっと歩いてた。

夜明け間近の海岸。

あれからこうちゃんはボクのことを追いかけて  
ボクはただ、ひとりになりたくて。

ずっと歩いてた。ずっと、ずっと歩いてきた。

テトラポットに飛び移るときに

こうちゃんは手をボクの方にのばした。

ボクはその手をとらなかった。

「ひとりでも、大丈夫だよ」

たぶん、心から そう、いていた。

空はゆっくりと明るさを取り戻して

いつものように一日をはじめようとしてる。

海は、思ったよりもないでいた。

風が吹いているのはボクの中だけ、なのかもしれない。

空の色が変わるのをぼんやりとみてたら、

身体を ぎゅう、と抱きしめられた。

「寒くない？」

「……ホンのちょっとね」

ヤセガマンは体に良くない。でも。

もう、本当のことはいわない。

絶対に。

壊れてしまうのは、カンベン。

こうちゃんも、ボクも。みんな。

「寒いから、帰ろうよ」

いわれたけど、動かなかった。

こうちゃんは、なにかいいたそうな顔のまま、  
もと来た道で もどってく。

「あっきー。帰ろ？ 風邪引くよ？」

どうしてそんなに優しいのかなあ。

考えれば考えただけ、わからなくなってきて。

目の前はぼんやりとにじんできて。

ああ、やだなあ。ボク、泣いてるんだ。

「ほら」

そうって、こうちゃんは手を伸ばした。  
ボクはその手を、とった。  
身体をぎゅう、と抱きしめた。  
こうちゃんは、なにもいってくれなかった。

もっと機嫌悪い顔してるかと思ったのに。  
もっと怒ってると思ったのに。  
いつもみたいに、ムチャクチャいって、ボクのこと困らせて、  
それで、笑いたかったのに。こうちゃんのこと、ちゃんと見て。

もう、どうしていいのかわかんないよ。  
なんていわれたかったのか、わかんないよ。

「もう、会わないようにするから」

「？」

「だから、ちゃんと幸せになって、ちゃんと、笑っていてください。  
でなきゃ、絶対に 許さないから」

ボクは、おなかに力を入れてそれだけのことをいうと、  
身体からそっと離れて、帰ることにした。  
こうちゃんは、もう、追いかけてきてはくれなかった。

いま、一番許せないのはたぶん、ボク自身だ。

さよなら、さよなら!

---

某月某日

たぶんこうなるはずいふんと前からわかっていたような気がする。  
最後まで本当のことをいわないのはあっきーの悪い癖だ。  
結局、駅で見つけることができた。ちらりとこっちを向いた時、  
赤く腫れた目がなんだかかわいそうだった。  
そして、そんなふうにはしか思えない自分が嫌いだった。

早朝の静寂を破るように始発の電車がホームに入ってきた。  
まだ人はほとんど乗っていない。だけど、わざとあっきーの横に座った。  
当然、会話などあるはずがなかった。手だけが重なっていた。  
トンネルをいくつか抜け、市街地が少しずつ見えてくる。日常はすぐそこにある。  
ふたりでずっと正面を向いていた。なぜだか涙が溢れてきた。

「ごめん」

それだけというのが精いっぱいだった。人前では(あっきーの前では特に)  
泣かないと決めていたはずだった。これはルール違反だ。  
周りの人たちはみな怪訝そうな顔をしていたことだろう。  
実際、どれくらい泣いていたのかわからなかった。  
ずいふんと長い時間だったような気もするし、そうじゃないのかもしれない。  
とにかくずっと「ごめん」とだけくり返してたことは確かだった。

「.....こうちゃんのせいじゃないよ」

あっきーはそういうと、ハンカチを差し出してくれた。  
涙をふいていたら、すこしだけ気持ちが収まったようだ。  
だけど、重なっていた手は少しずつ離れていった。  
今の自分にはそれを元に戻す資格はない。

いたってのんびりとした車内アナウンスが、  
もうすぐ降りる場所に着くことを告げていた。  
手のひらにはあっきーの感触だけが残っていた。

あっきーはようやくこっちを向いて  
困ったような顔で笑うと、  
気持ちはちゃんと伝わったから、とだけ行って  
ようやくついたいつもの駅で降りた。



「それじゃ、またね」

小さく手を振っていた。

手を振り返した。

笑顔だった。

こうちゃんと、ボク。

---

最近のボクは難しいことはあまり考えないようにしてる。

みんなの話にはそれなりに相づちをうって、  
とりあえず笑ってみたり。  
あの頃のボクと比べたら、それはまるで別人のようで。

「ねーねー、今夜の合コンさぁ」  
「また人数合わせ？ やだよ、もう」  
「まーまー、そういわないで。ね？」  
「あっきーが来るっていったら喜ぶ人だっているんだからさ」  
「どーだか。」  
「で、くるよね？ えっと、7時に時計台の下、集合ね」

マサキは、こういうところが強引だ。  
マサキにつきあって、何度ああいうところに行ったかわかんないくらい。  
キライなのに。人前にいるのも、騒ぐのも。

あれからこうちゃんには一度も会ってない。  
さみしいな、と思うことはあっても、電話もしないでいた。  
それでもいいと思った。大丈夫だ、って。

一回だけ、フジイが来た。うちに。  
どうやら心配してくれてたらしい。  
だけど、ボクの顔を見たら、なにか納得したのか、  
スーパーバグー杯のおやつをくれただけで帰ってしまった。

本当は、みんな、どうしていいのかわかんないのかもしれない。

なんて。いいかげん、かな。こういういいかた。

「ほんとに、まともなヤツくんの？」  
「この前みたいなの、勘弁してほしいよ、ボク」  
「あ、今度は大丈夫。も、えりすぐりだから」  
「とかなんとかいっちゃって、どーせ相方の連れだろ？」  
「あ、失礼なっ。今回は、はずれナシだって。保証する」

なかば無理やりつれてかれた合コン。  
ほんとはもう、帰りたい。別にどんなのが来たところで

ボクには関係ないんだし。今は。まだ。

「あ、じゃあ、紹介するね」

たがいを紹介しあう。まだ一人きてないらしい。  
あいつはいつも遅刻するからもう慣れちゃったよ、と  
マサキの相方は笑う。

「アイツ、電話して起こしても気づかないんだよね」

と。誰かがいきおいよくドアを開けてはいつてきた。  
気まずそうに、てれくさそうに笑ってる。

あ。ああ、そうか。そうだったんだ。

「……ゴメン」

「合コンぐらい遅刻すんなよなあ」

みんなにはたかれて、それでも笑顔が消えない。  
ボクは、どうしていいかわかんなくなって。  
でも、どうしようもなくうれしくて。

「オムライスでもおごってもらえばいいよ」

笑ってそういつてみた。

「コーヒーもつけ……」

ハトが豆鉄砲食らったみたいな顔をして、指をさしてるのは。  
こうちゃん。

「よし、けてーい」

途端にもりあがりだした。  
こうちゃんは、ものすごく困った顔をして笑っている。  
そのままの勢いで合コンははじまり、  
こうちゃんはボクのところへよって来た。

「ひさしぶり」

「うん。」

「フジイとはうまくやってる？」

「ま、ね。」

「そっか。それはよかった。うん。よかった」

ボクに笑顔を見せてくれるこうちゃんがいる、  
こうちゃんとちゃんと話せるボクがいる。

「なんか飲む？ とるよ」

「あ、そだなあ、そっちの水割りにしてよ」

今度こそはちゃんと、友達でいられるような、  
そんな気がする。

## サムシングブルー

---

いつもはあんなにコワイ顔してるのに、  
今日は にやけちゃって。  
あ～あ みっともないなあ。  
せっかくのメデタイ席なんだから  
もうちょっとシャキッとしなよね？

そんなボク言葉に  
「うれしい時にうれしい顔をしてなにが悪い」  
ほおをつついて反撃すこうちゃん。  
ダメだ。 いつもとぜんぜんちがう。

サムシングブルーはなにもついてないみたいだけど、  
ボクがブルー入ってるからちょうどいいか。 って、  
ヨキハンリョに言ったら爆笑してた。  
「いつでも対決しにきてもいいよ」ってね。

いけるわけないじゃん。 ふつー。

来なきゃよかったなあ、とはさすがに思わなかったけど  
明日っからどうやってヒマをつぶそうかなあ、なんて  
間の抜けたこと考えたりして、  
きっと親の気持ちに似てたりするのかもしれない。  
なんて。 やめよ。 こんなこと考えるの。

シャンパンがおいしくなくなる。

「今度はあっきーの番、かな？」  
耳元で話すこうちゃんに  
おもいきりゲーでパンチしてあげた。

## 決戦は金曜日

---

あの人は、ほんとうはこうちゃんを好きかどうか。  
ということだけ知りたくて、わざわざ呼び出した。  
はずだった。

「こうちゃんのこと、どう思ってるんですか」  
と聞こうと思ったのに、それより先に  
「ふたりってとっても仲いいよね」  
といわれてしまった。

ボクはあの人に、こうちゃんがいかにボクの前であの人のことを  
褒めちぎっているかとうとうと説いてしまった。  
なにしてるんだか。おせっかいていわれるだろうなあ。

「そうかな。フジイさん、なんかふたりがうらやましくて」  
ボクはあの人が一人称を「フジイさん」というところが  
あまり好きじゃない。  
「だったら、ボクの代わりにこうちゃんの相手して」  
「ホントにそんなことされたら、イヤなくせに」  
勝ち誇ったようにいうところなんか、もっと好きじゃない。

「ちがう？」  
言葉が、続か、ない。  
「そんなことないよ。こうちゃん、フジイの話しかしないもん」  
それだけのことしか、いえなかった。  
「でもそれはこうちゃんの方であって、君の気持ちじゃないじゃん」

「コーヒーのお客さま」  
絶妙なタイミングで入ってくるウエイトレス。  
もしかして、そういうふうにしなさいって  
マニュアルに書いてあるのかも。なわけないか。

ウエイトレスを見送ってから  
(それはまるで昼メロのようで、結構ばかばかしかったけど)  
フジイはさも楽しそうにこんなこというんだ。

「君の気持ちはどうなの。  
場合によっちゃ、フジイさん、協力してやってもいいけど」  
「そんなこといいよ。別にどうだっていいし。こうちゃんなんか」  
こうちゃん、ゴメン。やっぱりボクはフジイが嫌いだ。

## ハグ

---

コンビニから帰ってきたら、玄関前にあっきーが捨てられていた。捨てられていた、というのはあまり適切な表現ではないのだけれど、とにかく、ひざを抱えて半泣きでうずくまっているあっきーの姿は、どこをどう見たって、捨て犬のそれだ。

「犬を拾ったことはあるけど、人間は拾ったことはないぞ」

「じゃ、いますぐ拾ってください」

しょうがないやつだ。

本当に、「しょうがないやつだ」という感想しか持たなかったので、首根っこを引っつかんで、部屋の中に引き入れた。

コーヒーでも飲めば、少しは落ち着くだろう。

「泊まっていくか？」

「うん」

とはいったものの、寝相の悪さには自分でも笑っちゃうくらいなので、

「寝相が悪いから、ベッドから落としたらごめん」

と先に謝ってくことにした。反応が何もないのがいつものあっきーらしくない。

最近あっきーはあまりしゃべらなくなった。

どうしてなのか、それはよくわからないけど、聞くつもりもない。

聞いたところで、答えてはくれないだろうし、

あっきーはそうやって自分の中にため込んで、自分で始末しようとする。

どうにもならないくせに、だ。

少しは頼ってくれてもいいんだけどなあ。待ってるんですけど。

半分開けたベッドの中にあっきーはよろよろと入ってきた。

ふたりでこうやって寝るのはほとんど初めてに近いので、

どうにも落ち着かない。だから、寝たふりをすることにした。

「なんだ、もう寝ちゃったのか」

そう言うと、あっきーも毛布をかぶったようだった。

手を、握ってきた。こんなに冷たい手をしていただけるか。

かすかに震えるあっきーの手をそっと握り返した。

少しでも暖まるならば、その方がいい。

明け方、目が覚めてしまった。あっきーは毛布がはだけてしまって、

寒そうにしているので、かけなおした。

ジャマにならないようにしてるつもりなのか、硬直している。

そんなに緊張しなくってもいいんだってば。

ずり落ちそうになった身体を少し戻して、起きないのをいいことにハグしてみた。なんとなく、だけど。

なんとなくついでにもう一つしたいことがあったけど、

それはちょっとあんまりなので、やめにした。

かわりにあっきーをハグしたまま、もう一眠りすることにした。

起きたら、びっくりするかな。もしかしたら、ずるいのかもかもしれない。

だけどいま、あっきーにできる最大の感情表現だと思うのだけれど。



## フジイさん

---

なにがあったのかは知らないけれど  
こうちゃんのあの妙にすっきりとした顔はなんなのさ  
と、フジイさんは思う。

あっきーだって 強がってるみたいだけどホントは  
つついたらすぐ泣くようなヤツなんだからさあ  
これ以上 フジイさんに手間かけさせるようなこと  
しないでほしいよね、とも思う。

キミたちの子守じゃないんだからさ。

めったに降りないバス停から それこそ  
大魔神のごとく 歩きさくる。たたく。  
交差点を左に折れて、みつつめの路地をさらに左。  
建物のいちばん はじっこのドア。たたく。

「……はい」

「フジイさんだよ。あけて」

顔見た瞬間からいうことは決めている。だけど、  
本当はそんなこたア どうだっていい。  
フジイさんを怒らせるとどうなるかわかってんでしょね。

「よ。」

「よ、じゃないよ。なに考えてんのさ。キミもこうちゃんも。

人がせつかく心配してこーんな僻地まで来てやったっつーのにさ」

「ここの場所、こうちゃんに聞いたんだ？」

「そだけどさ」

なにそんなすっきりした顔してんのさ。キミまで。  
フジイさんはどうすればいいのさ。

「キミね、それでいいわけ？」

「いいって、……なにが？」

「フジイさん、こうちゃんのことひとりじめしちゃうよ？」

「うん。いいよ」

「本当に、いいの？」

それはそれは 今までに見たこともないような穏やかな顔、だった。

「いいよ。はじめから、僕のものじゃなかったけど、あげる。

こうちゃんのこと、お願いします」

深々と頭まで下げちゃってからに。そか。フジイさんの出る幕ははじめっからなかったわけだ。心配してソソした。

「明日っからはちゃんと出てきなさいね。

いい加減みんなキレかかっているから」

「うん。」

手に持ってたスーパーバッグをわたしてやった。

まったく。どうすんのかね、これから。

「フジイさん、帰るわ」

「上がってけばいいのに」

「いい。今日は帰る。また今度ね」

手をひらひらさせて、玄関をあとにした。

「あ、フジイ。」

後ろから声。

「なに？」

「……ありがとう。うれしかった」

なにがうれしかった、だよ。

ふざけんのもたいがいにしなさいって。

まったく。まあ、そういうことなら仕方ないけどさ。

完敗だよ、完敗。誰が誰にとって訳じゃないんだろうけどさ。

あっきーには、負けたよ。

はじめまして。

---

それは、もう何年も前のこと。

ボクがまだ学校に行ってたころの話。

\*

「今から、時間あいてますか？」

「え？ .....あ、まあ、はい。あいてます、けど？」

「じゃあ、ちょっと来てください。」

.....ということでボクは なぜか

手を引っ張られて (しかもかなりゴーインに)

メインストリートをダッシュしてる。

新入生勧誘の立て看板とか訳のわかんないアジ看板とか

そーいうの全部すつとばかして走る。走ってます。

.....だけど、

「いったい どこ行こうっていうんですかっ」

「海！」

「はああああ~~~~~??？」

ここから1時間半もかかるんだよ？

ジョーダンきついよ？

「クルマ買ったんで、練習につきあってください」

そうって、有無をいわさずクルマにのっけられた。

かわいいクルマ。銀色の、小さなクルマ。

「それはいいんですけど、でもボク、

あなたのことぜんぜん知らないんですけど」

「それはこっちもいっしょです。

たぶん大丈夫だろうと思って声かけてみたから」

なにが大丈夫なんだか。でも、悪い人ではないみたい。

だからといって、これといった話題もなく。

ボクは窓を全開にして外を眺めてた。

「運転、うまいんですね」

「……そんなことはじめていわれた」

そんなこんなで、ついたみたいです。海。  
まだすこし寒いけど、波はおだやか。  
ついた、ついたってハしゃぐ姿はもろガキンちょ。  
ここに来るまでタイクツしなかったのが不思議なくらい。  
でも、ないか。

クルマを降りて。  
天気がよくてよかったよなあ。  
そう、思うボクの前に立って。

「あ、自己紹介してなかったね。はじめまして」

深々と頭を下げるその人の名は、こうちゃん。  
ボクも、ちゃんとおじぎをしてアイサツをした。

「こちらこそ。はじめまして」

## 奥付

---

「こうちゃんとボク」

著者：添嶋 譲

発行：言葉の工房 ( <http://literary-ace.littlestar.jp/> )

初出：1998 - 99 Nifty-serve 詩のフォーラム 5 番会議室